

# *The Old Curiosity Shop* , Dickens , あるいはファミリーロマンス\*

小野寺 進

## I

Aldous Huxley を中心に酷評がなされて以来、<sup>1</sup> *The Old Curiosity Shop* (以下 OCS と略) は様々な形で再評価されてきた。<sup>2</sup> 短編小説として用意していたものをにわかに長編小説に作り上げたという、作品の成立事情を併せて考えれば、OCS は Dickens の作品群の中でも未完成であると言える。しかし、そこに内包されたものは作品全体へとつながる要素を多く孕んでもいる。特に、主人公が文字通りあるいは精神的に孤児であることは、Dickens の作品全体を通して見られる。ヴィクトリア朝の人々の生活の中心は家族であると言われているように、<sup>3</sup> Dickens は小説の中で腐敗した社会を痛烈な批判を加えて描き出すその一方で、特に炉辺やクリスマスを中心に家族の絆を描いた *Christmas Stories* 等に代表される親と子という近代家族を彼の小説群の骨子に据えてもいる。そこで私は、近代家族の物語としての OCS を、ファミリー・ロマンスを枠組みとして見ていきたい。

ファミリー・ロマンスとは、元来 Freud の用語で、子供が空想活動において自分の両親をもっと偉い両親に置き換えようとすることで、その際、子供は自分が捨て子であるとか、あるいは母親が不実を働いたために自分が私生児であるとか、ということ想像する自己の出生にまつわる幻想である。<sup>4</sup>

Marthe Robert は、Freud が提示したファミリー・ロマンスを敷衍し、いわゆる近代家族の成立に関連して、近代小説の起源からその発展にいたる推移を、その

精神分析的図式に類比させ、子供が両親に対する性の違いを認識するのを境に、前段階を「捨て子プロット」、後段階を「私生児プロット」として分類する。<sup>5</sup>

「捨て子プロット」とは、成長過程において、両親の中に自分に対する愛情と注意が離れていくのを知った子供は、両親から離れたたいという欲望を抱き、自分をもっと高貴な両親の「捨て子」だと想像することにより、過去の記憶に残された「失われた楽園」を取り戻し、全幅の信頼を寄せていたときの両親との同一化を企てようとするものである。この「捨て子プロット」に対して、「私生児プロット」の方は、性に対する差異に関連して、母親はいかなる場合も「确实」(“*certissima*”)であるが、父親の方は「常に不确实」(“*semper incertus*”)であることを認識した子供は、父の不在と母親が内緒で不貞を働いたという幻想を抱き、自分は不義の子であると想像する。その結果、自己の出生の起源を変更しようとする欲望は、不在である高貴な父親へと向けることとなる。但し、ここでの父とは別のシニフィアンの代わりにやってくるシニフィアンのことであり、置き換えがいわば想像的領域で行なわれる故、その構造は象徴的性格を帯びることになる。

この OCS において、Nell の物語を構築しているのは Nell 自身の幻想であり、かつ物語全体を作り上げているのは語り手である Master Humphrey の幻想であるという仮定の下に、従来指摘されてきた Nell は Dickens の義妹 Mary Hogarth で、Old Trent は Dickens の父 John Dickens であるとする伝記的解釈を可能ならしめる要因が、実は、ファミリー・ロマンスの象徴構造の観点から見た場合、フィクションとしての物語に内在している、つまり無垢な少女の物語として構築されている Nell の物語は、本来女の物語となるべき物語に男の物語が介入し、両者が混在する物語となっていることを本稿の課題としたい。それによって、逆に、Nell が Dickens の内において自己と義妹 Mary を二重に映し出す機能を果たす存在となっており、更には Nell がただ単に Mary のイメージによってのみ支配されているのではなくて、むしろ複雑に入り交じった自己の過去と Mary に対する Dickens の思いがどのようにフィクションとしての物語の中へ織り込まれ

ているかということもまた明らかとなるであろう。

## II

Freud と Marthe Robert のファミリー・ロマンスはいずれも自己の物語を構築する主体が男の子という男性モデルであり、女性モデルは含まない。このファミリー・ロマンスにおける二つの段階のうち、置き換えようとする両親の性的差異を問題にしない「捨て子プロット」の場合、物語る主体の性別は男女いずれであろうとかまわないが、主体が母親の道徳的下落を前提に不在である父親への同一化を企てる物語である「私生児プロット」では、欲望する対象の性別は非対称性を構成することになる。つまり、物語る主体が男性の場合、上昇を遂げるのは不在である父親であるが、女性の場合、不在によって物語を構築する同性の親は起源において確実な母親であるので、男性モデルと対称をなすことはできない。OCS において物語の構造軸は Nell と彼女を取り巻くグロテスクである故、<sup>6</sup> Nell を欠いた物語は不可能である。しかも幻想の中で Nell は願望成就すべく逃亡を自ら企てるが為に、物語を構築する主体となっている。性差を問わない「捨て子プロット」の場合は問題ないが、「私生児プロット」の場合は物語を構築する主体が女性であるので、その観点から Nell の物語を見た場合、当然女性モデルが要求される。「私生児プロット」における修正女性モデルを概略的に措定すれば次のようになる。即ち、物語る主体の常に「確実」である母親の文字どおりの死、或いは比喩的な死による不在を条件とし、最終目標として権力の座に近づくために結婚という手段で、頼りがいのある男性、あるいは「理解を示そうとする男性」への帰属ないしは同盟を結ぶことで、例えば *Middlemarch* の Rosamond Vincy のような社会的渴望を充足した完全性を備えた女性となることが女性プロットとなる。<sup>7</sup> それは *Emma* における Emma Woodhouse や *Middlemarch* における Dorothea Brooke 等が追い求めようとしたものでもある。しかし、この措定に

基づき、物語において Nell を女性モデルとして「私生児プロット」の観点から見た場合、不整合であることは明らかである。Nell には何ら権力志向の欲望や理想の結婚相手を求めることもなく、しかも彼女自身社会的上昇を遂げることはないからである。もし仮に Nell に上昇があるとすれば、それは彼女の幻想において悪夢ともいえる物語内の現実世界からの解放と無垢のまま永遠の命を確立することにある。確かに Nell は現実世界において変身を遂げないが、“At Rest”と題した Nell の死の床の挿絵から、Nell の魂の解放と不滅性が象徴的に表わされていると Jane R. Cohen らが解いているように、<sup>8</sup> Nell は自己の幻想の中で文字どおり天使へと上昇を遂げるのである。

Nell には、両親が既に亡くなり、母方の祖父と兄が一人という家族構成になっている。Nell の出生に纏わる話は、最後の方第 69 章において独身紳士が自己のアイデンティティを物語の話の中で明らかにされる。12 歳ほど年の離れた兄弟がおり、一人の女性を巡ってお互い恋敵となり、病弱だった自分を優しく看護してくれた兄に対して、弟は兄を幸福にしてあげようと国外に去る。その後兄はその女性と結婚するが一人娘を残したまま死んでしまう。その娘は放埒な男と恋愛関係に陥り結婚するが、惨めな苦悩の生活を送ることとなる。加えてその男も死んでしまい未亡人となるが、幼い息子と娘を残してすぐにあの世に旅立ってしまう。この幼い娘が Nell であり、その兄は Frederic、この二人を残された祖父というのが Old Trent で、その弟が独身紳士である。物語は冒頭から Nell の現実の父親と母親の不在が示されており、Nell の中にあるのは祖父から教えられた天国において永遠の命をもつ記憶の中の母親像だけである。<sup>9</sup> そこで前提となる母親が最初から欠如している Nell は願望を充足すべく物語を幻想の中で作り上げていく。

Quilp から逃れるために、Nell と Old Trent はロンドンから田舎へ向かって巡礼の旅に出る。しかし“The Child in her Gentle Slumber”と“At Rest”という二つの挿絵にもあるように、Nell の物語は彼女の寝ているところで始まり寝ていると

ころで終わると同時に、醜悪な古物に包まれた骨董屋と “a certain collection of odds and ends” (Ch.52、 p.391) に取り囲まれた古い教会と場所こそ違いますが共に同じ雰囲気呈してもいる。骨董屋、Punch と Judy の旅興行、Mrs Jarley の蠟人形、そして古い教会へと至る Nell の旅は、常にグロテスクなものによって取り巻かれることとなる。一時的にせよ Nell がそれぞれの場所に歩を止めるのは、かつて自分が住んでいた骨董屋とどこか類似したところを見いだしていたからに他ならない。Paul Schlicke によれば、骨董屋というものは一種の博物館であり、種々雑多なものを置いているという点で、見せ物小屋と何等変わりないということである。<sup>10</sup> このことは Nell が物理的には旅をしているが、精神的にはなんら骨董屋から一步も出ていないことを示している。ちょうど、Nell がかわいがっていた籠の中の小鳥が、Kit の手に渡ってからも解き放たれることがないことにも象徴的に表わされているとも見て取れる。物語は Nell が見た夢と言えるのであるが、彼女が死んだ時 “At Rest” の挿絵で小鳥は椎から解放され自由の身となっているように、その夢のまた夢の中で Nell は願望を成就するのである。

“We will be happy” (Ch.12、 p.94) と語る Nell が祖父と共に歩む物語は、未来へ向かうのではなく、むしろ幸福だった過去へ向かうのであり、墓地で少年が Nell に対して “you will be an Angel” (Ch.55, p.411) というように、Nell の探求は天使となるべく自己のアイデンティティの確立にある。Nell は最終目的となるべき古い教会に着いた時、”A quiet, happy place – a place to live and learn to die in!” (Ch.52, p.386) という。次章で、その場所で死んで眠るのは苦痛ではないと感じ、更に礼拝堂の小塔の天辺に立った時、天に近づいた感じをも憶える。これはとりもなおさず、旅の途中訪れた学校で少年が死んだ夜、Nell が見た夢は “mingling with angels, and smiling happily” (Ch.26, p.194) な少年の姿であり、加えて Nell が自分の亡くなった母親は墓に入っているのではなく天国にいると思っていることとの連想となる。Nell にとって、死とは墓の中に入るのではなく、天上へ上り不在の母親たる天使へと同一化を計るものであり、現実世界からの自由と不滅性を

かち得るための目的となる。それ故、過去の「失われた楽園」を取り戻すという  
意味であるならば、Nell の願望は「捨て子プロット」のそれと言える。但しこ  
での願望は、死んだ現実の母親との同一化ではなく、象徴としての不在の母親と  
の同一化を遂げようとするものである。もし現実の母親との同一化であるとする  
ならば、その夫である身を持ち崩した父親の格をあげてしまい、当然母親は下落  
し、Nell 自身も下落するものになってしまうからである。それは Nell の物語が  
完全な「捨て子プロット」と成りきらない所以でもある。Nell が現実の母親と根  
本的に違うのは、結婚をしないことで、それによって子供の無垢性を保つことが  
できるのである。「私生児プロット」から Nell の物語を見た場合、死ぬことを目  
的にその願望が達せられるわけであるが、女性モデルに必要とされる頼りがいの  
ある男性あるいは「理解を示そうとする男性」への帰属ないしは同盟を媒介にし  
てはいないし、社会的権力の欲望などもない。そこに完全性を渴望する女性の物  
語とはなりきらずに、無垢な少女の物語として Nell の物語がとどまっているこ  
とが了解される。しかしその一方で、「私生児プロット」の男性モデルによって  
Nell の物語は支配されることとなる。女性モデルでは起源において確実な母親は  
不在であるため、当然目的達成の妨げにならないはずの常に不確実である父親の  
存在が Nell の願望を成就する妨げとして現れるのである。そのため男性モデル  
では不可欠となる父親の不在と父親殺しが物語に介入してくることとなる。

実際の両親は不在なのであるが、祖父である Old Trent の賭博狂への変貌ぶり  
は Nell にとって幻影としての父親の再来となる。そこでこれを克服すべく、  
Nell は祖父の死を夢見ることで父親殺しを行使するのである。

If he (Old Trent) were to die-if sudden illness had happened to him, and he were  
never come home again, alive - if, one night, he should come home, and kiss and  
bless her as usual, and after she (Nell) had gone to bed and had fallen asleep and  
was perhaps dreaming pleasantly, and smiling in her sleep, he should kill himself

and his blood come creeping, creeping, on the ground to her own bed-room door!

(Ch.9, pp.69-70)

Loralee MacPike によれば、これは Nell の祖父を殺したいという願望に他ならないということであり、次に、the Valiant Soldier という宿屋で Old Trent が Nell から金を盗む晩に、彼女が見た自分の死の夢、つまり自分が「高い塔から落ちる」(“falling from high towers”) (Ch. 30, p.228) 夢は祖父の死を願ったことへの償いであるということである。<sup>11</sup> MacPike の議論の妥当性は、Old Trent が Nell に「不安な夢」(“uneasy dream”) について許しを乞う場面で (Ch.12, p.93)、Nell が許しに対して拒否するのは、彼女が「不安な夢」を祖父殺害の夢と同定しているからだとする点からも十分裏付けされよう。

Old Trent の中に現われる父親像と不在とは密接に結びついている。それは賭博狂へと変貌した時で、一つは真夜中に外出して家に不在であること、もう一つは the Valiant Soldier で Nell の部屋へ忍び込み盗みを働いて、自分の部屋に不在であることであり、しかも、共に祖父の死に対する Nell の夢が絡むところでもある。その本来いるべき所にいないことを示す不在は、父親としての義務と責任のメタファーともなっている。Old Trent に見る無責任な父親像は他にも、*Our Mutual Friend* の Mr Dolls や *Little Dorrit* の William Dorrit そして *Hard Times* の Mr Sleary 等に見ることができる。Nell の祖父に対する厳しい態度は物語の最初から見られる。しかもそれは Old Trent が変貌を遂げた時に限ってである。荘然自失となった Old Trent が Nell に対し “Do I love thee, Nell?” (Ch.1, p. 8) と訊ねた時、Nell は返答をためらい黙り込んでしまう。それは Nell の Old Trent に対する拒絶を示している。というのも Nell は Old Trent が Nell を金持ちにしてやると言ったことをきっぱりと拒否するからである。これは父親殺しで結実することとなる Nell の悪の父親像への拒絶が物語の初めからあったことを示している。

母親は既に不在であることに加え、父親の不在と父親殺しを通して、“The

Spirit's Flight” という挿絵が訴すように、Nell は天使へと上昇、あるいは安住の地をかち取るのである。こうした Nell の目的達成を可能ならしめるのは、男の物語としての「私生児プロット」が「捨て子プロット」に介在することによってである。

### III

語り手と登場人物との観点から物語を見ると、語り手 Humphrey と Old Trent は共に老人であるということだけでなく、共に夜に外を徘徊する習慣をもっていることや、Humphrey が “Ugly Humphrey” というように、<sup>12</sup> 不気味でグロテスクな存在であることと、冒頭で Nell がこの気味悪い Humphrey を見て逃げ出さないのは祖父である Old Trent との共通性を見いだしたからだと考えられる。また Old Trent と Daniel Quilp とについては、Nell が The Valiant Soldier で変貌した Old Trent を醜くて恐ろしいグロテスクな存在である Quilp の幻影と見間違えることにある。Humphrey から Quilp までグロテスクという点で一直線につながっており、更に Dickens が Quilp のような真似を家族の前でして見せたり、Quilp の義母である Mrs Jeniwin は Dickens の義母 Mrs Hogarth をモデルにし、いわば Dickens は Quilp 自身であると既に指摘されているように、Dickens と Quilp との連関は明らかである。<sup>13</sup> 語り手 Master Humphrey は Old Trent に、Old Trent は Quilp に、Quilp は Dickens にとメトニミックにその像を重ねていく。いわば、この帰納的連鎖機能によって語り手から Dickens へとその像はつながるのである。しかし、こうした伝記的事実は別として、フィクションとして物語を見た場合、女の物語に男の物語が介入してくるのは、Nell の物語が男の視点から語られていることに起因する。“I feel as if we were both Christian” (Ch15, p.117) と Nell が自らを Christian に準えるように、物語は John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* を下敷にしている。但し、Nell にとって重荷は原罪ではなくて、賭博狂へと変貌した



Old Trent なのである。 *The Pilgrim's Progress* で語り手 (あるいは作者)が夢の中で物語を見るように、この Nell の幻想の物語は、語り手である Master Humphrey が作り上げた幻想となっている。まさにこれから起ころうとしている物語を彼は冒頭において空想の中で描くのである。

As it was, she seemed to exist in a kind of allegory.... “It would be a curious speculation,” ... “to imagine her in her future life, holding her solitary way among a crowd of wild grotesque companions; the only pure, fresh youthful object in the throng ....” ... all that night, waking or in my sleep, the sleep, the same thoughts recurred and the same images retained possession of my brain ... alone in the midst of all this umber and decay, and ugly age, the beautiful child in her gentle slumber, smiling through her light and sunny dreams.

(Ch.1, pp.13-4)

“The Child in her Gentle Slumber” の挿絵に見る Nell が眠っている姿は、物語の中で描写されたものではなく、語り手が夢の中で描いたものなのである。

Nell の物語は彼女自身の幻想であり白日夢となっている。というのは Nell の遍歴が Quilp の影によって成立しているが故に、Quilp 像は Nell のアイデンティティの一部となっているからである。Nell が逃れようとしているのは現実の Quilp ではなく、幻想の Quilp である。”Quilp indeed was a perpetual nightmare to the child (Nell), who was constantly haunted by a vision of his ugly face and stunted figure” (Ch.29, p.217)と、Nell は逃亡以来絶えずその幻影につきまとわれるのである。Mrs Jarley の蠟人形の所でみた夢の中でも “Quilp, ... was somehow connected with the wax-work, or was wax-work himself” (Ch.27, p.209) と Nell にとって蠟人形は Quilp 像へ変わるのである。Quilp は Nell の属する虚構、また彼女の虚構におけるアイデンティティの一部となっているように、Nell は語り手 Master

Humphrey の夢の一部となっている。しかも Quilp が、その性格や行動などの点で既に指摘されているように、Punch 劇の Punch であり、<sup>14</sup> 疑似的ともいえる生しか与えられていない人形同然の Nell が、Mrs Jarley の蠟人形で案内係をする際に、その呼び物の一つとなってしまうように、両者は共に見せ物としての役割を果たしている。物語は両者の目を通して見られず、彼らは常に見られるものとして立ち現われているのである。Kit に対する Quilp と Brass の陰謀のエピソードも、物語自体と Nell の発見を遅延させることにある。つまり、Nell の願望成就是語り手によって操作されていることになる。なぜなら、語り手の位置は全知であり、当然のことながら登場人物とした場合にはその時知るはずもない情報、例えば

Nell の過去の幸福だった時代の説明 (Ch.9, p.69) 等、を得ていることや、物語の最後で “Such are the changes which a few years being about, and so do things pass away, like a tale that is told!” (Ch. THE LAST, p.555) と述べていることは、この物語全体が Master Humphrey の過去に経験した事柄を再構築したもの、<sup>14</sup> 或いは想像によるものであることを示している。つまり、物語の authorship は語り手 Humphrey にあるのである。

#### IV

1841 年 1 月 8 日付の John Forster 宛の手紙の中で、“Old wound bleed afresh, when I only think of the way of doing it: - Dear Mary died yesterday, when I think of this sad story” と述べ、<sup>16</sup> Nell が死んだ時 “so young, so beautiful, so good” (Ch.72, p.542) と Mary の墓石に刻み込んだ言葉そのまま与えられているように、Nell と若くして死んだ義理の妹 Mary Hogarth との関連は明らかである。更に、Nell の祖父である Old Trent の造形を考えると、Dickens の実父である John Dickens が想起される。Old Trent が賭博狂で、いわばそのつけを Nell に押しつけたように、

John Dickens の浪費癖のために、Dickens 一家は負債者監獄に入れられ、そのために Dickens がウォレン靴墨工場へ出され、一家の負担を背負う形になり、立身出世の願望が打ち碎かれることになる。それが、Dickens のその後の trauma となったとも言われている。<sup>17</sup> この子どもが親を養うという親子関係の倒錯した世界は、OCS の Little Nell と Old Trent の関係や *Little Dorrit* の Amy Dorrit と William Dorrit の関係をはじめとして、彼の小説に多くに見出すことができる。<sup>18</sup> Dickens が工場へやられたときの絶望感は言葉に表わせないと次のように Forster に打ち明けている。

“No words can express the secret agony of my soul as I sunk into his companionship; compared these everyday associates with those of my happier childhood; and left my early *hopes of growing up to be a learned and distinguished man* crushed in my breast. The deep remembrance of the sense I had of being utterly neglected and hopeless; of the shame I felt in my position; of the misery it was to my young heart to believe that, day by day, what I had learned, and thought, and delighted in, and raised my fancy and my emulation up by, was passing away from me, never to be back any more; cannot be written.”<sup>19</sup> (イタリックは筆者)

ここに、父親によって教育を受け出世するという、自己の願望充足が妨げられ、Freud の用語で言えば、「去勢」といったものを被ったことが表わされている。Old Trent が “in many respects I am the child, and she the grown person” (Ch.1, p.10) と言ったように、いわば彼の親としての責任と義務が欠如しているように、Dickens は父親の中に責任と義務の不在を強く感じたのである。<sup>20</sup> そこには無意識に父親に対する復讐心あるいは父親殺しの欲望が内在していたとも受け取れる。という理由は、Dickens が父の死に直面し、“While the book [*David Copperfield*] was in course of being written, all that had been best in him came more and

more vividly back to its author's memory; as time wore on, nothing else was remembered. ...” と Forster が述べているように、<sup>21</sup> Dickens の父親に対する葛藤はもはや解消され、かつてのいやな思い出の中の父親像を排除し、高貴な父親像へと置き換えるのである。Dickens は死の 5 年前に Forster に宛てて彼らしからぬ言い回しをした後で、“I find this looks like my a poor father, whom I regard as a better man the longer I live” と付け加えている。<sup>22</sup> 過去の嫌な思い出の中に存在した父親像を排除し、格上げた父親像へと Dickens は同一化を遂げるのである。ただそれは、Dickens が意識的にそういった思いを抱いていたと言っているのではなく、象徴的行為としてのファミリー・ロマンスの幻想がその実人生において彼に内在していたということである。

## V

このように、ファミリー・ロマンスとして *OCS* を読むことで、フィクションとしての Nell の物語が女の物語としてよりはむしろ無垢な子供の物語であることを層明らかなものとしていると同時に、父親殺しや父親の不在を通して、男の物語が介在する物語となっており、それ故に伝記的解釈を許容する物語となっていることもまた了解されるであろう。物語において Nell は Dickens にとって自己と義妹 Mary の二つの機能を担う存在であり、フィクションとして Nell の内に潜む、祖父を救おうとする反面、拒否せんとする相反感情に織り込まれているのである。またこの物語において重要な役割を演じる人物に Dick Swiveller がいる。Dick を物語に登場させた時の Dickens の気に入りぶりは伝記から明らかであるが<sup>23</sup>、Dick は詩人として虚構の世界と現実の世界の橋渡しをする人物となっている。Fairy Tale が支配する物語の中で彼は Quilp の化けの皮を剥し、Machioness を Fairy Tale の世界から救出させるのである。Dick Swiveller が最初は単なる脇役として登場していたのが、大きく膨らんで一つのプロットへと形成され、更に Nell

中心の物語が 33 章以降 Swiveller 中心の物語へと移行しているのは、Dickens が自己を Nell から訣別し、Nell に Mary のイメージを付与すると共に、疑似的生の世界で人間としての生を獲得していく Swiveller に自己を見いだしたからであろう。つまり Nell から Swiveller へプロットの中心が移動するプロセスは、Dickens の創作上の内的葛藤を示すプロセスでもあったと考えられなくもないのである。その意味において、後に *David Copperfield* や *Great Expectations* など自伝的要素がフィクションとして織り込まれることになるものが、初期の作品である OCS においてすでにその典型として如実に示されているのである。

Boheemen が既に *Bleak House* の Esther にファミリー・ロマンスを読みとったように、特に父親像探しや父親殺しといったものが見られる自伝的要素の強い *David Copperfield* や *Great Expectations* を中心に、Dickens の諸作品においても象徴構造としてのファミリー・ロマンスを見いだすことができるだろう。この OCS において Dickens が受け得なかった教育を Dick Swiveller が Macheioness に対して施すのも、*Sketches by Boz* で「Astley 劇場ほど我々の子供時代の記憶を強く思い起こさせてくれる場所はない」<sup>24</sup> と述べているように、父親のいない Kit が家族を連れて Astley 劇場に行き、楽しい一時を過ごすのも、Dickens のファミリー・ロマンスの幻想だったのかも知れない。

## 註

\* 本稿は 1991 年度ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会 (6 月 15 日、宮城教育大学) に於いて、シンポジウム「*The Old Curiosity Shop* — 新しい読みの可能性を探る」の中で、「*The Old Curiosity Shop* とファミリー・ロマンス」と題して発表したものに修正・加筆を施したものである。

1. Aldous Huxley は “it is distressing in its ineptitude and vulgar sentimentality” であるとし、Steven Marcus は “There is not much doubt that *The Old Curiosity Shop* is Dickens's least successful novel, a

work in which he seems to have lost much of his intellectual control, abandoning himself to all that was weakest and least mature in his character as a writer.” と述べている。Aldous Huxley, *Vulgarity in Literature* (London: Chatto and Windus, 1930), p.57; Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey* (1965; New York, London: Norton, 1985), p.129. また Oscar Wilde は “one must have a heart of stone to read the death of Little Nell without laughing” とその感傷主義を批判していると George H. Ford は *Dickens and His Readers: Aspect of Novel Criticism Since 1836* (1955; New York: Gordian Press, 1974), p.55 で言及している。

2. Gabriel Peason, “*The Old Curiosity Shop*” *Dickens and the Twentieth Century* ed. by John Gross and Gabriel Peason (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), pp.77-90; A. E. Dyson, “*The Old Curiosity Shop*: innocence and the grotesque,” *The Inimitable Dickens* (London: Macmillan, 1970), pp.21-46; John Lucas, *The Melancholy Man: A Study of Dickens’s Novels* (1970; Sussex: The Harvester Press, 1980), pp.73-92.を参照。

3. Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870* (New Haven and London: Yale University Press, 1957), p.341 を参照。

4. Sigmund Freud, “Family Romances,” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* 24vols (The Hogarth Press and Institute of Psychoanalysis, 1953), IX, pp.236-41.

5. Marthe Robert, *Roman des origines et origins du roman* (Paris: Grasset, 1972). (マルト・ロベール, 『起源の小説と小説の起源』岩崎力・西永吉成訳、1975年 河出書房新社)

6. 1848年版の序文で Dickens は次のように述べている。“... in writing the book I had it always in my fancy to surround the lonely figure of the child with grotesque and wild, but not impossible companions, and to gather about her innocent face and pure intentions, associates as strange and uncongenial as the grim objects that are about her bed when her history is first foreshadowed,” (xii) *OCS* からの引用は *The Old Curiosity Shop* (1841; London: Oxford University Press (The Oxford Illustrated Dickens), 1987) に拠る。

7. Marianne Hirsh, “Female Family Romance and the Old Dream of Symmetry” ‘ *Literature & Psychology* 32, 4 (1986), pp.37-47. 及び Christine van Boheemen, *The Novel as Family Romance: Language, Gender, and Authority From Fielding to Joyce* (Ithaca and Loudon: Cornell University Press,

1987) を基に大枠での措定を試みたものである。更に Hirsh によれば同盟を企てる異性 (男性) はヒロインが子供の幻想の対象を回避する為に母親とならないようにする男性であり、それ故そのエロチックな関係は常にインセスト的になるということである。

8. Jane R. Cohen, *Charles Dickens and His Original Illustrators* (Columbus: Ohio State University Press, 1980), p.129. 及び F. R. and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (1970; Harmondsworth: Penguin Books, 1980), p.445 を参照。これによると、頭上に描かれたマドンナと幼子、魂が旅立つための開け放たれた窓、窓枠には砂時計と自由の身になっている小鳥と少女の右手の下には祈祷書が描かれ、Nell の不滅性が象徴されているとある。

9. "... he told me about my mother, and how she once looked and spoke just like me when she was a little child. Then, he used to take me on his knee, and try to make me understand that she was not lying in her grave, but had flown to a beautiful country beyond the sky, where nothing died or ever grew old..." (OCS, Ch.6, p.49)

10. Paul Schlicke, "The Old Curiosity Shop," *Dickens and Popular Entertainment* (London; Allen & Unwin, 1985), pp.87-135 を参照。

11. Lorelee MacPike, *Dostoevsky's Dickens: A Study of Literary Influence* (London: George Prior Publishers, 1981), pp.78-86 を参照。

12. Charles Dickens, "Appendix" *The Old Curiosity Shop* (1972; Harmondsworth: Penguin Books, 1980), p.675.

13. Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970), p.29 及び John Cary, *The Violent Effigy* (1973; London; Faber And Faber, 1979), p.27 を参照。

14. Gabriel Pearson, *op. cit.*, p.86 及び Paul Schlicke, *op. cit.*, p.125 を参照。

15. この物語の構想段階での表題に "PERSONAL ADVENTURES OF MASTER HUMPHREY: *The Old Curiosity Shop*" とか "*Master Humphrey's Tale, Master Humphrey's Narrative, A Passage in Master Humphrey's Life*" を Dickens は考えていた。John Forster, *The Life of Charles Dickens* 2 vols (1927; New York: Dent & Sons (Everyman's Library), 1980), I. p.117 を参照。

16. *The Letters of Charles Dickens* vol. 2. ed. Madeline House and Graham Storey (Oxford: Clarendon

Press (The Pilgrim Edition), 1969), pp.18-12.

17. Dickens のウォレン靴墨工場での体験が “trauma” か “fiction” かを巡ってこれまで様々議論がなされてきた。少年時代の過去の体験を再構築し、大人となった時点でそれ臆味を付与するという点で “fiction” であり、また一方で、出世の願望が打ち砕かれたということで Dickens にとっては “trauma” であったことは明らかである。Peter Ackroyd が “fiction and autobiographical account” (P.83) として断定を回避しているように、また Albert D. Hutter が “autobiographical reconstruction” と指摘しているように、その体験は Dickens のフィクションを特徴づけると共に、彼の数多くの体験が作品の中に盛り込まれる際のフィクション・メイキングの基盤ともなっているのである。ちなみに、過去の体験について、*David Copperfield* に “As the endurance of my childish days had done its part to make me what I was, so greater calamities would nerve me on, to be yet better than I was” (Ch.58, p.815) とある。Edmund Wilson, “The Two Scrooges,” *The Wound and the Bow* (1952; London: Methuen, 1961), pp.1-93; Steven Marcus, *op.cit.*, pp.358-78; Albert D. Hutter, “Reconstruction Autobiography: The Experience at Warren’s Blacking,” *Dickens Studies Annual* vol. 6 (1977) pp.1-14; Peter Ackroyd, *Dickens* (1990; London: Mandarin Paperbacks (Minerva edition), 1991); Charles Dickens, *David Copperfield* (1850; London: Oxford University Press (The Oxford Illustrated Dickens), 1982) を参照。

18. Dickens の小説における親子関係については、Arthur A. Adrian, *Dickens and the Parent-Child Relationship* (Athens, Ohio, and London: Ohio University Press, 1984) に詳しい。

19. John Forster, *op. cit.*, I. p.22.

20. LaPointe は Nell が “an embodiment of Dickens himself experiencing Mary Hogarth’s death” であるとして、Dickens の父親の義務と責任の欠如を論じてはいるが、Nell = Dickens という一面的な読みしかしていない。Adriane LaPointe, “Little Nell Once More: Absent Fathers in *The Old Curiosity Shop*,” *Dickens Studies Annual* vol. 18 (1989) pp.19-38.

21. Forster, *op.cit.*, II. p. 92.

22. *Ibid.*, II, p.92.

23. *Ibid.*, I, p.119.



24. Charles Dickens, *Sketches by Boz* (1836; London: Oxford University Press (The Oxford Illustrated Dickens), 1973), p.104.

出典：『文化紀要』（弘前大学教養部）35（1992）：\*\*-\*\*.